

研究 報告

千葉県におけるコナジラミ媒介ウイルス病の発生状況と薬剤防除の現状

千葉県農林総合研究センター なかやま 中山 たいせい 大誠・しおた 塩田 あづさ あづさ

はじめに

コナジラミ類は施設果菜類における重要害虫であり(図-1)、吸汁加害による生育阻害やすす病の発生に加え、各種病原ウイルスの媒介虫として大きな問題となっている(本多, 2006)。特にタバココナジラミ(以下:タバコ) *Bemisia tabaci* (Gennadius) は, *Tomato yellow leaf curl virus* (TYLCV) によるトマト黄化葉巻病や(図-2), *Tomato chlorosis virus* (ToCV) によるトマト黄化病を媒介するほか(図-3), ウリ類では *Cucurbit chlorotic yellows virus* (CCYV) 等のウイルス病を媒介することが知られている。また、オンシツコナジラミ(以下:オンシツ) *Trialeurodes vaporariorum* (Westwood) についても, ToCVの媒介虫として知られている。

これらの病原ウイルスは感染株において、減収や果実品質の低下を引き起こす。そのため、果菜類栽培では、媒介虫であるコナジラミ類の侵入防止および密度抑制が防除対策の中心となっている。

千葉県では、2005年にトマト黄化葉巻病が初確認され(久保ら, 2007)、その後県内各地へ発生が拡大した。また、2013年にはトマト黄化病も確認され(千葉県, 2013)、現在では夏秋トマト栽培を中心に恒常的な問題となっている。近年は高温条件下でコナジラミ類の増殖が活発化しやすく、施設内へ侵入した後、密度が急速に上昇する事例が増加しているとの声が聞かれる。

さらに、薬剤散布を頻繁に実施しているにもかかわらず、コナジラミ類の密度上昇やウイルス病被害が発生する事例が認められており、生産現場では「薬剤を散布しても以前ほど効果が感じられない」といった声が聞かれるようになっていた。全国各地ではタバコを中心に複数薬剤に対する感受性低下個体群の存在が確認されている(栃木県, 2021; 佐々木, 2022; 熊本県, 2025)。これら



図-1 オンシツコナジラミ(左)とタバココナジラミ(右)



図-2 トマト黄化葉巻病の症状

Occurrence of Whitefly-Transmitted Virus Diseases and Current Status of Chemical Control in Chiba Prefecture. By Taisei NAKAYAMA and Azusa SHIOTA

(キーワード: タバココナジラミ, オンシツコナジラミ, 薬剤感受性, トマト, 黄化葉巻病)